

経理 AI エージェント

「デジタル労働力」で仕事が回る

TOKIUM 代表取締役

黒崎賢一

KENICHI KUROSAKI

はじめに

なぜ「経理から」なのか

人材不足の解決策は、すでに確立されている。

そう言い切っても差し支えない、むしろそれ以上の効果をもたらす存在が、「AIエージェント」です。

AIエージェントとは、複数のツールを統合的に活用して業務の自動化や効率化を実現することができるソフトウェアやシステムの総称です。これは従来のソフトウェアとは決定的に異なります。従来のソフトウェアは人がツールとして使うものでしたが、AIエージェントは自律的に動く「労働力」です。

例えば、人間に代わってAIが出張手配や経費承認をしてくれます。SaaSを入れて業務が少し楽になった、というレベルの話ではありません。これまで人間にしかできないと思われていた領域を、AIエージェントが担い始めています。

AIエージェントを特に活用しやすいのが、バックオフィス領域、中でも経理業務です。詳細は本文に譲りますが、ルールに則って処理することが求められる経理業務は、AIの得意分野です。

そして、本書は「経理AIエージェント」をタイトルにしていますが、その影響は経理部にとどまりません。経理業務は経理担当者だけで行うものではなく、出張申請や経費精算など、社員全員が行うものです。それぞれにかかる時間が短縮されることで、大きな業務の効率化を実現できます。その成功体験から、バックオフィス全体へ、さらに会社全体へと広がっていくでしょう。

単純な反復作業から解放された経理担当者は、自分の時間をより生産的なことに使うことができます。経営には欠かせないお金の知識を生かして、経営判断をサポートする役割もあるでしょう。取引先の入出金の動きを見ながら、会社全体にアドバイス

するような業務も生まれるかもしれません。

AIエージェントと人間の関係性は、テクノロジーと共に進化していきます。詳細は第4章でお伝えしますが、段階的に変化していくでしょう(図表1)。

現状は、ヒューマンインザループと呼ばれるフェーズにあります。人間が担っているタスクを部分的にAIと分担し、人間はAIだけでは判断できない部分を担います。

ここから、ヒューマンオンザループ、ヒューマンアウトオブザループといったフェーズをたどり、**最終的に人間が**

図表1 人間とAIの関係性の進化

① ヒューマンインザループ (Human in the loop)

AIが推奨事項や洞察を提供する。人間がそれに基づいて最終的な意思決定やアクションを行う。

② ヒューマンオンザループ (Human on the loop)

AIが高い自律性と判断権限を持つ。人間がそのプロセスを監督し、必要に応じて結果の確認や連携を行う。

③ ヒューマンアウトオブザループ (Human out of the loop)

AIが意思決定から実行までをシームレスに完結させる。人間はシステムの微調整や例外的なテストのみを行う。

何もしなくても業務が遂行され、人間は新しい変更が必要なときにだけ関わるようになります。

時間が最も尊い資源

私が代表を務めるTOKIUM(トキウム)は、社名の由来でもある「未来へつながらる時を生む」を志に掲げ、「あらゆる経理作業から、人々を解放する」をプロダクトビジョンにしています。大学在学中の2012年に起業し、家計簿アプリの開発から事業をスタートさせました。その後、経費精算サービス、請求書受領サービスへと事業を広げ、これまでに3000社以上の企業にご利用いただく法人支出管理のインフラとなっています。

13年以上にわたり、「領収書や請求書の処理」という一見地味な領域に向き合い続けてきました。なぜこの領域にこだわるのか。それは、私自身のいくつかの原体験から、「時間こそが最も尊い資源である」と確信しているからです。詳しくは本書の終盤で触れますが、経理作業に費やす膨大な時間から解放されることが、企業と、そこで働

く人の未来を変えると信じています。

そして2025年、経理AIエージェントの提供を開始しました。私たちが目指すのは、経理作業そのものを丸ごと手放し、人間が本来持っている「時」を取り戻すことです。本書では、そのための具体的な方法論を紹介しています。13年以上経理業務の自動運転に向き合ってきたからこそ気付いた本質を、お伝えできればと思います。

本書の構成

第1章では、日本が直面している労働力不足の正体を捉え、なぜいまバックオフィスから変革が必要なのかを論じます。

第2章では、AIエージェントの現在地を示し、それがいかにして「ツール」を超えた「同僚」となり得るかを解説します。

第3章では、私たちの開発現場で培った「マイクロタスク分解」というメソッドを公開します。業務を極少単位に分解し、AIに任せるための具体的な設計図です。こ

れは経理のみならず、あらゆる業務に応用可能な思考法でもあります。

第4章では、経理の現場でどのようにAIエージェントによる自動化を進めればいいのかをお伝えします。また、今後訪れるテクノロジーの変化と、それによつて変わっていく人間の役割を考えます。

第5章では、私自身がなぜこの事業に命を燃やしているのか、その原点について触れさせていただきます。東日本大震災での経験、祖父の死、そして起業後の幾多の困難を経て、私は「時間」こそが最も尊い資源であると確信しています。

「成り行き任せの未来」をただ待つのか。

それともテクノロジーと協働し、主体的に「時」を生み出すのか。

経理とは、会社のお金を管理するだけの仕事ではありません。企業の活動すべてが数字となって集まる、情報の結節点です。だからこそ、経理が変われば、会社全体が変わります。AIエージェントという新たな仲間と共に、人間がより創造的に、より人間らしく働くための第一歩を、ここから踏み出しましょう。

第 1 章

日本から働く人が消えていく

— AIは何を変えるのか

変革は「経理」から始まる	014
経理における「人手不足」の正体	021
経理部門を襲う“負のスパイラル”	027
テクノロジーが人手不足を解決する	034
経理は「まずやってみる」に最適	040
経理から全社へと広がる自動化	047
「成り行き任せの未来」から脱却する	054
「AIに仕事を奪われる論」からの脱却	061

第2章

AIエージェントの現在地
— ツールではなく働き手として

AIエージェントの歴史

AIエージェントは「究極系」へ

より成果を高める委譲の方法

誰もが「秘書」を持つ時代

現実になりつつある「デジタルツイン」

068

074

085

092

097

第3章

AIエージェントを動かす設計図

— マイクロタスク分解

複雑な業務を「マイクロタスク分解」する

昔から実践されてきたマイクロタスク分解

マイクロタスク分解をしてみよう

106

113

120

第4章

経理業務でのマイクロタスク分解 124
どこまでの細かさで分解するのか 132

経理部の未来

— 自動化への移行期をどう過ごすのか

AI自動化の3ステップ 144

自動化のさらなる未来 154

無数のデジタル労働者が働く組織に 161

経理から生まれるイノベーション 166

経理部はどうなるのか 170

第5章

時を生む会社になるために —インフラとしての覚悟

未来へつながる時を生む

会社経営の原点

「時を生む」仕事を始めるまで

経費精算システムの誕生

ニーズの本質をつかんだきっかけ

私たちが担う役割は

「インフラ」としての覚悟を持つ

失敗から学んだマネジメント

この時代にあえて人が集まる意味

おわりに

参考文献

232 228 222 217 212 207 203 198 193 188 182